

「もたらされたわざわい」

ダニエル書 9 : 12 - 19

September.13.2020

ダニエル 9 : 12 - 19 (パワポ)

Preface

私たちキリスト者が、人生を生きていく中で悩むのは、イエス・キリストの贖いを通して、まことの神を知る者となり、また救い主イエス・キリストを信じ、神の子とされたにもかかわらず、

なぜ、変わらずこんなにも苦しいのか？ なぜ、苦しみが止むことはないのか？ いやむしろ、キリスト者として生きるようになってから、それまで悩まなかったことについて悩みだし、クリスチャンとして生きない方が、自由で、楽で、楽しいんじゃないかとさえ思ってしまうことがあるということです。

そして、さらに悩ましいのは、キリスト者として生きることが嫌ならば、辞めればいいだけのことですが、辞めることさえできない。

自分の口で信仰告白し、自分の思いで、キリスト者になると決心したわけですから、これまた、自分の思いで辞めようと決心すれば辞められるはずなのに、辞めることも出来ないし、かえって、辞めることの方が大変なことになるということも感じている。

今、ダニエルを始めとする、捕囚となったイスラエルの民たちが長年、共通して抱いている感情が、正に、このような思いです。

神の民と言われ、選民と言われ、他の部族種族や国々が体験したこともないほどの救いの経験をし、乳と蜜の流れる約束の地まで与えられた、正に、聖なる民とされたイスラエルが、なぜ、叩かれ、踏みつけられ、滅び、捕虜となって70年間も苦渋を味わわなければならないのか？ という、深い苦悩がありました。

じゃあ、その苦悩から脱却するために、神の民を止め、イスラエルと呼ばれることを拒み、イスラエルという称号・呼称を変えればいいのに、それをするのも出来ない。

つまり、彼らが陥っている葛藤は、“経験している苦悩が神の民を辞める理由にはならないし、苦悩ゆえに神の民を辞めることも出来ない”ということです。

むしろ、その苦悩ゆえに、神の民であることを自覚し、その苦悩ゆえに、神の民であることとは何ぞやということを考え尽くし、祈り倒し、聖書の言葉から解答を見つけていくことしか出来ないという処遇に捕らえられていることを、

薄々、少しずつ、はっきりと気付かされていきます。

つまり、信仰は、私の意思によるものではなく、神の選び、神の特別で一方的な選びにより着せられた特権と恵みであると同時に、自らの力で自由に脱ぎ捨てることの出来るものではないということを、説得され、納得していくように導かれて行くものだと、気付くわけです。

好きな時に信じ、好きな時に辞められるものではなく、まことの神を信じる者とし、また、その信じる対象である神ということお方が実存であり、真実であり、真理であるんだということを確認できるように、また確認できるまで、神ご自身が導いていくプロセス（行程）が、信仰だということです。

信仰は、私の意思で辞める辞めないを決められるものではありません。  
もし、そうであるならば、それは、聖書の教える信仰ではないでしょう。

今お読みましたダニエルの祈りは、それまで天下になかったほどの大きなわがわいが、自分たちに、もたらされたにもかかわらず、信仰とは、神様が神様ご自身の存在を、信じる者に認めさせる説得であり、導きであり、人が決して与えることの出来ない恵みであることに気付かされていることが分かります。

## Part One

わがわいが人間や人間社会に臨むことと、神の存在とは、大昔から現代に至るまで、いつも天秤にかけられてきました。

神がいるならば、こんな災いが起こるはずはない。  
愛なる神がいるのに、何でこんなむごたらしいことが起こるのだと、災いが臨むことと、神の存在を認めるということには、いつも大きな葛藤がありました。

今のコロナ禍にあっても、大いにそうですね。

リチャード・ドーキンスという生物学者の名前をお聞きになったことがあるかもしれません。

先週土曜日だったか日曜日の朝日新聞でも、彼の書いた本が特集されていましたが、彼の書いた“神は妄想である”という聖書を否定し、聖書の神の存在を否定する本が、ベストセラーになって世界的に話題となりました。

で、その論述も同じです。  
こんな災いの多い世界にあって、神がいるはずなんでないという考えを、一見すると理性的で論理的に見える語法で、並べ立てています。

しかし、ダニエルの祈りを見てもみますと、わざわいが神の存在の有無に対して挑戦を仕掛け、しかも拮抗した競争が出来ている代物でもなく、わざわいが神の存在を否定する理由にはならないと、はっきりと述べています。

むしろ、信仰を与えられ、救いに与り、神の子・神の民とされた者たちにとっては、わざわいという大きな苦しみ、困難、苦難さえも、神が確かに生きて働いておられることの証であり、神が神の民を練り、整え、完成させるために用いる業であると、はっきりと表明しています。

そして、ダニエルは、それまで天下になかったほどの大きなわざわいが、自分たちイスラエルにもたらされたことは、神の御言葉の成就であるとまで言いません。

つまり、天下になかったほどの大きなわざわいが、自分たちにもたらされたのは、必然であり、当然であり、至って正しいことであつたと言うのです。

### **ダニエル 9 : 12 - 14 (パウロ)**

天下になかったほどの大きなわざわいを、主なる神様がもたらしたことを、ダニエルは、“主のなされたみわざ” だと言い、さらには“すべて正しい” とまで言い切ります。

つまり、「直面しているこの苦悩こそ、神が自分たちにしてくださっている最善であり、最良であり、ベストである。」と言っているわけです。

国が滅び、民が滅び、国語を失い、文化を失い、すべての関係が破壊された、窮乏ゆえに母親が息子や娘の肉を食らうほどの見るも無残な、イスラエルの滅びは、神が成してくださった最善の導きだつたと言うのです。

むしろ、そのわざわいゆえに、どこからともなくやって来たのか分からないような、ちりあくたのような存在に過ぎない自分たちを、養い、育て、育み、愛し、待ち、耐え、祝福してくださった主の御手よりも、世の富を、世の知恵を、世の力を、世の声を、人の教える知識を神にして、その自分たちの信奉する神々の隅っこにおまけのように、まことの神をくっつけて生きてきた不義と偽りの生き方を生きずにはいられない罪人でしかなかったと言うのです。

## **Part Two**

### **ローマ人への手紙 7 : 18 - 25 (パウロ)**

使徒パウロの深い呻きの言葉です。

イエス・キリストの救いに与り、神の子とされ、神の民とされ、御国を受け継ぐ特権に与り、しかも、神の言葉を宣べ伝える宣教師、牧師として生きている聖職者であるにもかかわらず、自分の内に、善が住んでいないことを否応なしに認めざるを得ない日常の自分の姿を、嘆きます。

したいと思う善を行うことが出来ずに、したくないと思う悪を行ってしまう自分自身を嘆きながら、“私は本当にみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか”と言うほどに、自分がどうすることも出来ない罪人であるということを骨身に染みるほど、痛感しています。

しかし、しかしです。

それでも、主イエス・キリストを通して、神に感謝してるんです。

この罪人であるという呻き・嘆きが、イエス・キリストにうちにある罪の赦しと神の子とされたという事実から外され、漏れたということにはならないんです。

かえって、「そんな私にさえも、全く変わらず、神の御手が伸べられ続けており、信仰が保たれ続け、自分の身に成された救いが完成に向かって着々と進んでいるという事実は揺るがされていない。」と、確信しています。

### ローマ人への手紙 8 : 1 - 2 (パウロ)

神の一方向的で、特別な選びによって与えられたイエス・キリストによる救いは、なおも私のうちで、有効かつ揺るがされることのない事実であると言い切ります。

私たちキリスト者の人生には、なおも葛藤があり、なおも苦しみがあり、なおも困難があり、なおもわざわいがあるけれども、

それらが、私たちに与えられている救いや、神の民とされた特権や、御国を受け継ぐという約束が、消去される根拠や理由になることはない。

逆に、それらの苦難は、私たちを鍛錬し、練り、神の子らしい聖なる気品と余裕を備えさせるために用いられ、

神の御手を明確に我が人生に見出すために用いられる道具だと、御霊によって確信するわけです。

### 第一コリント 1 : 8 - 9 (パウロ)

聖書が教えるイエス・キリストにある救いは、至って、受動的です。

私たちキリスト者は、神によって堅く保たれ、責められるところがない者とされ、イエス・キリストとの交わりに入れられた者たちです。

つまり、私たちキリスト者に約束されているのは、神の御手の中にあって成される完成だけです。

信仰クラスに完整コースがありますが、神の前に完全に整えられることが決まっている者とされたのが、私たちキリスト者です。

またそれは同時に、神の前にあって誇れるものなんか何もなく、恥しかなことを心底知り、主なる神さま以外誇る事の出来ない者へと変えられていくのが、私たちキリスト者だということでもあります。

### 第一コリント 1 : 26 - 31 (パウロ)

私たちキリスト者は、わざわいを通して、神の前に恥を知り、神の御前で無に等しいものであることを知り、神の御前で誇ることがないようにされ、誇るとすれば主なる神のみを誇る者となるために、選ばれた神のものとされた民です。

だから、ご安心ください。

私たちが今生きている人生の現場は、神様の最善であり、最良であり、ベストです。

そこで体験している多くの苦しみや困難を通して、私たちに堅く保ち、イエス・キリストの日に責められるところがない気品あふれる、余裕あふれる、幸あふれる神の子とするために、必ず必要なところを通っています。

### Part Three

だから、ダニエルが、断食をし、粗布をかぶって、灰をかぶり、哀願をもって、「神が、私たちに大きなわざわいをもたらしたのは、御言葉の成就であり、すべて正しい。」と、祈るのです。

ダニエルは、このわざわいが、自分に、そして自分たちにとって最善なんだと、神の御前にへりくだりつつ、御霊によって、告白するのです。

ダニエル書の講解が始まってからこの1年間、ダニエルが、聖なる神の霊の宿る人だと見てきましたが、ダニエルが聖なる神の霊の宿る人だというのは、

ダニエルの能力にもよらず、ダニエルの出生にもよらず、ダニエルの財にもよらず、ダニエルの学にもよらず、ダニエルの努力にもよらず、ダニエルの経験値にもよらず、ダニエルの社会的地位にもよらず、ダニエルの倫理道徳性にもよらず、ダニエルの民族性、賢さ、分別、英知にもよらず、ただただ、神の深すぎて、また広すぎて、言い尽くすことなんかとてもとてもできない、人類の歴史、世界

の歴史でさえも収容できないほどの愛をもって、成してくださった一方的な神の恵みであります。

そして、神の恵みと慈しみであるということに、苦悩を通して、悟らされたわけです。

ダニエルは、神の前に全面降伏するよう導かれ、恵みを知りました。

だから経験している苦悩は、すべて正しいんです。  
その苦悩が、神の御怒りや憤りに起因しているならば、なおさら、正しいんです。

間違っているのは、私たち人間の方です。

そして、その正しい神が、神の民を神の民とするために導いておられるので、新たに施してくださる哀れみと赦しと回復があることを信じる事が出来るわけです。

新たに施してくださる哀れみと赦しと回復を信じる事の出来たダニエルは、続けて、さらにこう祈ります。

### ダニエル 9 : 15 - 19 (パワポ)

イザヤ書 41 章に

### イザヤ書 41 : 9、14 (パワポ)

という言葉がありますが、

神の民の出所は、虫けらです。

地の果て、どこからともなく湧き出てきたような虫けらを、選び、退けず、熱心をもって助け、守り、導き、愛すお方が、主なる神様です。

そんな神様に、ダニエルは、信頼して懇願するんです。

## Part Four

聖書には無数の登場人物が出てきますが、

神の助けと導きと、そして痛みと困難と苦しみが、巧妙に織り交ぜられた人生を歩み、その歩んだ人生に神を見出した代表的な聖書の登場人物を一人挙げるとすれば、ヨセフだと思います。

皆さんご存知の通り、ヨセフは、分別もなく幼稚にも、自分が権力者になるという夢の話を見聞かして、兄たちの怒りを買って、エジプトに奴隷として売り

飛ばされてしまいました。

そして、売り飛ばされていったエジプトの高級官僚ポティファルの家では、ポティファルの妻の誘惑に対して、至って真っ当に対処したにもかかわらず、その真っ当な行いが真っ当に評価されることなく、今度は監獄に入れられてしまいます。

監獄に入れられてからも、ヨセフは、真っ当に生きましたが、その真っ当さが正しく評価され、日の目を見るまでには、長い年月がかかりました。

そんなヨセフの生き様を聖書に記録するにあたって修飾されている言葉が、“主がヨセフとともにおられた”という言葉です。

“主がヨセフとともにおられても”、奴隷として売り飛ばされ、“主がヨセフとともにおられても”、監獄に入れられ、“主がヨセフとともにおられても”、真っ当に生きようとする努力が報われるまで、長い年月を要しました。

“主がヨセフとともにおられるならば”、奴隷として売り飛ばされることもなく、監獄に入れられることもなく、すべての誤解と曲解が解けてしかるべきだと、私たちは思いますが、そうはならないんです。

この時のヨセフの心情と神の御手について綴っている詩篇があります。  
詩篇105篇です。

### 詩篇105：17－19（パワポ）

ヨセフは、確かに信仰の人だったと思いますが、その導かれる過程において、すべてがアーメンで、すべてが納得がいき、すべてに主の御手を見出すことが出来たわけではありませんでした。

ヨセフの心情には、「なんで奴隷に売られてしまわなければならないんだ！」  
「なんで足には苦しみのかせをはめられ、首は鉄のかせに入れられなければならないんだ！」という苦悩がありました。

でも、その苦悩には、別の側面がありました。

それは、主の言葉が、ヨセフを練るという側面です。

練られたヨセフがついに口にした言葉が、創世記45章です。

### 創世記45：7－8（パワポ）

「ですから、私をここに遣わしたのは、あなたがたではなく、神なのです。」

歩んだ人生に、いや、歩んだ人生ではなく、神によって歩ませられた人生であることを認め、認識するんです。

自分の歩みに、自分の人生に、神の足跡を見出すのです。

これが、詩篇105（:19）の“主のことばは彼を練った”ということです。

この後、ヨセフは、自分を奴隷に売り飛ばした兄たちと和解をしますが、和解が先ではなく、物事に神を見出せたことが先です。

和解は、人間の力や努力や知恵や行いによって成せるものではなく、物事に唯一まことの神を見出せた時に、自然に起こる、神のわざです。

物事に神を見出すところまで、神の言葉によって練られたヨセフは、自分を奴隷に売り飛ばした兄たちを赦し、抱擁し、財産を分け与えるまでの神の子としての余裕と、気品と、信仰と、成熟を獲得しました。

ヨセフの話は、信仰者のサクセスストーリーのように思われがちですが、サクセスストーリーに重きが置かれているのではなく、

神の子らしく変えられ、キリストに似た者と変えられ、信仰者としての実力が付けられているということに、本来、その焦点があります。

ここに至るまでには、兄たちに得意げに自慢してしまう愚かさ、未熟さ、浅はかさ、罪人さ加減を通り、その罪ゆえに奴隷として売り飛ばされ、良い行いを良い行いとして評価されることがない無念と、悔しさと、やりきれなさを経験しなければなりません。

そして、神の前であって、虫けら同然であるにもかかわらず、助け、守り、導き、祝福してくださる神の熱心を悟るのです。

### Conclusion

人の人生の価値は、その人生に神の熱心を見出すことが出来るか、出来ないかにかかっています。

だから、私たちキリスト者の信仰生活は、私たちが主人公ではなく、父なる神、御子なるイエス様、聖霊なる神様の三位一体なる神様が主人公です。

よって聖書の主人公は、無数の登場人物ではなく、神です。

私たち罪の赦しに関してまでも、（イザヤ43：25）



イザヤ43：25（パワポ）

わたし、このわたしは、わたし自身のために、あなたの背きの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。

というほどに、主なる神様が主人公です。

私たちの罪の赦しさえも、私たちのためではなく、一義的には、神様ご自身のためです。

言い換えますと、私事は、すべて神様事になるほどに、神様は私たちを愛しておられます。

そして、その愛の証しであり、答えとしてくださったのが、イエス・キリストです。

だから、大丈夫です。

今、神様が御言葉をもって私たちを練っている最善で、最良で、ベストのところを私たちは通っていますから、ご安心ください。

今は、そうは思えないけれども、必ず、神様が御言葉をもって私を練っておられる最善で、最良で、ベストのところを通過してきたと、喜んで告白できる時が来ます。

今日は、この礼拝堂が、三位一体なる神様を礼拝するために献げられて、34年目の日です。

34年間、土浦めぐみ教会を、そしてそこに集う私たち一人一人を見捨てることなく、助け、守り、導いてくださった主イエス様を今一度見上げ、また、これからも、助け、守り、導いてくださることを感謝して、またさらに期待して、主なる神様を褒めたたえていきましょう。

お祈りいたします。

祝祷：ダニエル9：17